

現在、日本国内の地方の医療は深刻な状態に置かれ、今後少子高齢化の加速により、さらなる状況の悪化が予測されている。私が考える一番の課題は、圧倒的な医師不足である。地方では安定的な医療体制が整備されていない上、医師一人あたりの負担が増大している。私が住む北海道の医療の要となっている北海道大学でも同様だ。北海道大学は地方自治体からの依頼により、医局員として医師を雇い地方に派遣するシステムを構築し、地方の医療体制を支えている。しかし、医局員自体が減少し、更なる医療提供体制が必要である地域に派遣できないという問題が生じてきている。このままでは地方の医療崩壊は確実だ。では、どうすればこの深刻な状況に新たな解決の糸口を与えることができるだろうか。

私は地域医療のあり方について考えをめぐらせ、模索することが重要であると考え。地域医療とは、地方における病院などの医療機関での治療・ケアにとどまる言葉ではない。人々がそれぞれ住む地域での、地域全体ですべての住民の健康で幸せな生活を支えようとする体制のことだ。よりよい地域医療のために、私は大きく二つの医療の実現が必要であると考え。

一つ目は、予測医療である。現在科学技術の向上や医学研究の進歩により、病気の進行を事前に予測し、初期段階での治癒を目指す予測医療の研究が加速している。私が研究室訪問させていただいた北大の研究室では、“超早期医療”の実現に向け研究を進めている。“超早期医療”とは、臓器間のつながりにより、発症した臓器ではない臓器に現れた微小炎症から病気を予測する医療だ。このような病気の予測技術を搭載した機器の全国的な普及により、居住地によらず住民が健康状態の変化を早期に察知し、未来を見通して生活することができる。そして、医師不足、医療提供体制が脆弱であるといった地域の医療課題に対処することができる。

二つ目は、地域社会の繋がりによりつくる”支える医療“である。全ての住民の生活をサポートするには、医療従事者だけでなく、多職種の人たち、地域住民との連携が不可欠となる。患者の居住地に関わらず、人生に対するより多様な選択を可能にするために、地域社会の中で、人々が対話し互いの健康状態に気を配る。そして、患者・家族の生活、患者が目指す人生についての理解を深め、包括的なサポートを行う。特に高齢化が深刻化し終末期医療という選択が広がりを見せる中、医療措置に頼りすぎない”支える医療”の重要性がより高まるだろう。

以上より、私は医学の研究者としてこの二つの医療の実現に貢献し、地域医療の形を見つめなおすことで、誰もが幸せで健康に暮らせる社会を実現させたい。身近な地域で全ての住民の健康を目指す地域医療について考えることは、日本国内、ひいては世界における医療のあり方をよりよくすることに繋がるだろう。新たな医療が確立した未来は、想像を超える素晴らしい世界だ。

(1200 字)